

## 論文要約

論文題目 観月の諸相にみる平安時代の「文芸」

申請者 陳 馳

本論文では、観月の諸相を通して、平安時代における「文芸」はどのように成立したのかを考察し、かつ平安時代中期に形成した国風文化と共に発展していった、平安文化が成立する要となる和風化の本質を探りたい。本論文で取り上げる「文芸」とは個人的ないし社交の場合で行われる和歌や吟詠などの、文学をつくるまでの行為であり、文学と史学の要素を兼有する概念である。「文芸」から考察すれば、作品そのものに焦点を絞る「文学」と比べればより立体的に、政治や美術などあらゆる方面を内包する「文化」と比べればより重点的に、本論文の課題の核心である「和風化」を明らかにすることができる。したがって、本論文では平安貴族が文学作品を創作する際に投影する意識と、平安貴族が文芸活動を行う場という文学と歴史、両方の視点から「文芸」を考察したい。そして、その端緒として、観月に目をつけた。何故なら、まず月は人の生活や信仰、また文学とも深く関わる重要な存在からである。加えて、国風文化と共に展開した摂関政治の時代において、平安貴族の生活は夜型化という現象があり、それは政治だけではなく、「文芸」にも及んでおり、平安貴族の独特の美意識を育てていた。夜にならなければ行われない観月は夜の「文芸」の筆頭と言っても過言ではない。したがって、平安時代の「文芸」ないし「文化」を論じるには、観月は恐らく最も適している着眼点であろう。以上の課題に基づいて、本論文では以下の五章で論説を展開したい。

第一章では、八月十五夜の観月が平安時代において宮廷儀式化したかどうかについて考察した。八月十五夜の観月はほかの大陸から伝来した年中行事と違い、唐代になってから形成しつつあったものなので、完備された儀礼などもなかった。晩唐から宋代にかけて庶民層まで浸透して風俗化を遂げた中国の八月十五夜に対して、日本の八月十五夜は風俗化が相当後の時代のことであり、中国とは異なる形で発展していた。八月十五夜の観月は日本に伝来した時に、まだ唐詩に見られる風流な遊びにすぎず、それが文人貴族によって受容され、最初は漢詩宴で行われていた。『田氏歌集』と『菅

家文草』にはそのような記録が多く確認できる。そして、貴族たちは最初の模倣から、和歌を詠んだり、和風の宴遊を行ったりして、八月十五夜の観月の和風化を遂げた。康保三年（九六六）の清涼殿の宴と、寛治八年（一〇九四）の鳥羽殿の宴はその典型であった。康保三年の宴は観月の純粹さが欠けているが、前栽合に尽くした風流は紛れもなく平安貴族の独特な美意識が感じられるものである。一方、寛治八年（一〇九四）の宴は船上賞月という若干漢風の要素が感じられる作法であるが、管弦や和歌なども融合して行われて見事に和風の観月に仕上がるものである。しかし、それは単発のものであり、恒例化した年中行事としては不成立であり、宮廷儀式としてはまだ過渡期にあったのである。とはいえ、八月十五夜の観月はしばしば観月の作文詩会や和歌会・歌合の形で多様に行われており、文芸活動の場となっていた。

第二章では、九月十三夜の観月の発生・展開と共に生まれた「名月意識」について考察した。九月十三夜の観月は近年の研究によって、延喜年間からではなく、十一世紀の半ばころから発生したのが明らかにされた。その発生の原因について、筆者は九月十三夜詠に多く見られる、「名に高し」をはじめとする「名」の表現を、『中右記』に記された宇多院の九月十三夜に関する「仰せ」と結びつけた。『中右記』の記述の真偽はともあれ、当時の貴族たちは九月十三夜の月に対して、「名」の表現を使うのは、単純に「有名」だと称賛していたというより、九月十三夜の「名」の由来、あるいはその先例を意識していたと思われる。その証拠として、八月十五夜は九月十三夜より遙か以前から定着したにもかかわらず、十一世紀末までに「名」の表現で詠まれたことは見られない。その後、八月十五夜と九月十三夜は相互に意識して観賞され、共に「有名な月」と称されるようになった。「名月」という名称は平安時代にまだ存在せず、室町時代の連歌に詠まれていた「名の物」から生まれた可能性が高いが、「名月意識」という内容的な部分はこの時点で、詳しく言えば十二世紀三十年代頃においてすでに成立したと言ってもよかろう。

第三章では、筆者は『色葉字類抄』に「ありあけ」が「晨明」のみならず、「待月」とも表記されたという事実疑問を感じ、それは「ありあけの月」と「待つ月」の関係を意味しているのではないかと考え、それを契機に両者の関係について考察した。「ありあけの月」は、理論上、満月以後、夜に出て、一晩中沈まず、いずれ夜明けころになってもまだ空に残る月であると定義すべきであり、出るには夕闇の時間を待つ必要がある「待つ月」はその重要な一面である。ただし、文学作品で詠まれた「あり

あけの月」は、みな十九日ほど以降の月となっていた。その原因はありあけ頃に月はまだはっきり見えるかどうかというだけのものではなく、月の出を待つ感覚も一つの重要な基準だと思われる。その基準によって、「夜更け以後に出る月」は「ありあけ頃の月」と同様に、「ありあけの月」の最も重要な一面と見なされていたのであった。そして、後朝の別れを象徴する「ありあけ頃の月」と同様に、「待つ月」としての「ありあけの月」も思いを託されて詠まれていた。平安貴族、特に女性貴族にとって、「ありあけの月」の出るところは思い人はもう来ないと判断する、一つの時間的指標であり、待ち倦む長い夜の中の、慰めの存在でもあった。それに加えて、待てば必ず出る「ありあけの月」は来てくれない待ち人と比べられ、裏切らない象徴と見なされていた。

第四章では、中国で詠まれていた三日月の「待月」の平安時代における受容の実態を考察した。第三章の補説によれば、日本ではほとんど夕闇以降に出る月しか「待月」の対象とならないのに対して、中国では一ヶ月中の月が全て「待月」の対象である。ただし、月前半の月の待ち方はやや特殊であり、満月以降の月のように、その出を待つ「待月出」ではなく、明るくなるのを待つ「待月明」である。中でも三日月の「待月」はとりわけ特殊な存在である。三日月の「待月」は、もともと夜空に存在する新月が明るくなるのを待つ「待月明」であり、また同時に、朔日から見えなくなった月が再び夜空に出るのを待つ「待月出」でもある。三日月の「待月」は唐詩では明らかに詠まれていたのに対して、平安時代の文学では『中右記部類紙背漢詩集』に収録された大江匡房の詩という一例しか管見に入らず、広まらなかったのであった。その原因は、第三章で論じた和文学の「待つ月」の影響が強かったと考えられる。しかし、鎌倉時代に入ると、初秋の三日月を待つことで、これから本格の秋を待つという表現は見られるようになり、漢詩の表現と通じている部分があるが、漢詩から受容したものではなく、独特な感性が現れている、日本独自の観月の表現だと思われる。

第五章では、平安時代において宴遊化した庚申待と観月の関係について考察した。庚申待はもともと庚申の夜に徹夜して過ごすという、中国の道教で説く「三尸説」によって生まれた修行法であった。しかし、庚申待は日本に伝来してから、本来の修行の趣旨から離れていき、宴会を開き、詩歌管弦などの娯楽をして、一晚を過ごすという、徹夜するという形だけが残された貴族の社交の場となった。そのような庚申待は六〇日ごとに行われ、間違いなく「はじめに」で言及した平安貴族生活の夜型化の契

機にもなっており、また観月の「文芸」の場を提供していたのである。

以上のように、第一章と第五章では文芸活動が行われる場から、第二章・第三章・第四章では文学を創作する時に投影した意識から、観月の諸相を論じてきた。その論説により、本論文で取り上げた課題が明らかにされた。平安時代における「文芸」に見られる和風化は主に三つのパターンがある。一つ目は、漢風「文芸」を理解し、あるいは誤解して受容することである。ただし、本来のまま受容して伝えられる文化は存在し得ないので、漢風「文芸」の和風化する過程においては、多かれ少なかれ必ず変容が随伴する。例えば、八月十五夜は形だけ変容された例であったが、庚申待は趣旨まで変えられてしまった例であった。一方、言うまでもなく三日月の「待月」のような、一時受容されたものの、和風「文芸」の趣旨と衝突し、平安貴族の間に定着せず後世に伝わらなかったものもある。二つ目は、漢風「文芸」の影響を受けず、独自に和風の「文芸」を創造することである。和風化は単なる漢風文化を和風にするこのみならず、独自のものを創造し発展させることも和風化を深める行為として認められるのである。本論文においては、九月十三夜の観月と「待つ月」としての「ありあけの月」に対する意識がそれに当たる。三つ目は、受容された漢風「文芸」と独自に創造された和風「文芸」と、両方を意識し、融合することである。日本独特の文化である九月十三夜と、中国から伝来した八月十五夜が「名月」としてまとめられるようになったのは、まさにその体現であった。平安貴族は、そういった行為を重ね、平安時代の「文芸」を成立させた。そして、そういった行為はまさに平安文化の和風化の本質であり、平安貴族はこのような和風化を通して、平安文化を築き上げたのであった。